

0. 準備

今回のニューヨーク交流会の企画は、4月下旬ごろから、本格的に始まり、FOS2012年の奨学生の生駒君、西田君、潮田君らとともにディスカッションをしながら進めた。交流会は、8月2日の夕食から始まり、8月4日の朝食までとなっており、我々学生は、主に3日のプログラムについて議論をした。プログラムの内容について、2012年の奨学生全体に意見を伺ったところ、様々な意見があった。一部を以下に示しておく。(※印は実現したもの)

- 研究所視察 (IBM ワトソン研究所、ベル研究所 etc)
- 市内観光 (※エンパイアステートビル)
- 芸術鑑賞 (オペラ、バレエ、ミュージカル)
- あるトピックについてディスカッション (※)
- 学生の講演 (※)
- クルーズディナー (※)
- ハッカソン
- 財団のプロモーションビデオ作り

1. 交流会 1 日目

交流会はホテルでの夕食から始まることになっており、相席になった奨学生やOB、船井電機の関係者の方などと交流を深めることが出来た。エンパイアステートビルの見学には思いの外時間がかかり、見学を終えてホテルに向かう頃には深夜も更けていたので、来年以降有名な観光地に見学に行くには、事前に下調べをした方が良かったと思った。

2. 交流会 2 日目

前日の見学が長引いたことを考慮して、30分遅らせて開始した。交流会の名簿を作ったのは良かったが、時間の都合上自己紹介の時間が省略になってしまったため、完全に生かし切れなかったのが少々惜しかった。朝1番は、船井会長のビデオレターの再生から始まった。我々奨学生は、船井会長の熱い志によって支えられているのだということを改めて実感でき、もっと頑張ろうという気持ちが高まった。益田先生による財団の事業報告に続いての根岸先生の講演は、インターネットの記事などでよく見るような、「若者よ、海外へ出よ」という趣旨の講演を予期していたが、先生の専門分野の触媒や遷移金属についてのお話を聞くことが出来た。以前どこかで記事を目にしたことがあったが、ノーベル賞を受賞する確率が1000万分の1だとすると、その確率は、高校や大学などの競争を勝ち抜くたびに10人に1人のセレクションを7回突破すると考えればよい、という考え方がやはり印象に残った。今我々は、奨学金を得て、海外のトップスクールに留学している時点で、10人

に1人のセレクションを何回か突破してきているが、その先にさらに1分の1となるためには、トップスクールで勉強していることに甘んじることなく、個人として優れた成果を上げていかなければならないということを実感した。講演後のQ&Aでは、先生の専門に関すること、人生観に関することなどの質問が出た。

午前中のプログラムが押していたので時間に少し不安があったが、会場で食事が出来たので、午後のプログラムに素早く移ることが出来た。午後は山本さん、梅谷さん、岩井さんによる講演から始まった。今回、講演をお願いする人は、トピックのバリエーションや留学先、短期留学生か学位留学生かといった観点から決めさせていただいた。講演後には、岩井さんの海外での仕事の探し方に関する講演を始め、多くのフィードバックが会場からあった。交流会終了後には、講演のスライドを共有してほしいというリクエストを多く受けた講演者の方もいた。

3日のプログラムは、最後に「留学・アプライして見えてきたこと」、「日本の大学や企業に望むこと」に関してディスカッションを行った。1つ目の「留学・アプライして見えてきたこと」に関しては、米国・日本の大学院の違いなどの体系的な話よりも、留学し始めた今だからこそ見える、より個人的な気づきなどをもっと聞きたかったが、説明が不十分だったためか、具体的な体験や感想などを十分に引き出せなかったと感じている。また、ディスカッションについては、グループの代表が発表した後、全体でそのテーマについて議論できる時間があるとより良かったと思った。事前の導入が無くても、ディスカッションは非常に盛り上がり盛況だったが、あまり深いところまで議論が出来なかったので少し物足りなく感じた。

夜のディナークルーズは、多くの奨学生から良かったという評価をもらった。普段見られない視点からニューヨークの夜景やランドマークを鑑賞でき、美味しい料理に舌鼓しつつ、船のデッキで色々な方と交流が出来、非常に充実した時間を過ごすことが出来た。

3. 総括

交流会の運営や内容に関して、改善が必要な所が多かったかもしれないが、交流会の全体的には、有意義だったという意見や、来年はこうしたい・ここでやりたい、というような意見を自然と聞くことができて良かったと思う。2泊3日という日程は、交流会を、緊張感をもって終えるにはちょうど良い長さだと感じた。初日か最終日には、どこか研究所の見学などを入れるのもよさそうだった。本交流会を通じて、同じスタートラインからスタートし、苦楽を共にしている他の奨学生と交流できることは、我々にとってかけがえのない機会であり、同期や先輩方の活躍や頑張りを聞くことが大きな励みになった。本交流会を実現させてくれた財団の方々、来賓として参加していただいた根岸先生、また、交流

会の企画に協力してくれた生駒君、西田君、潮田君をはじめとする同期の方々に、感謝したい。